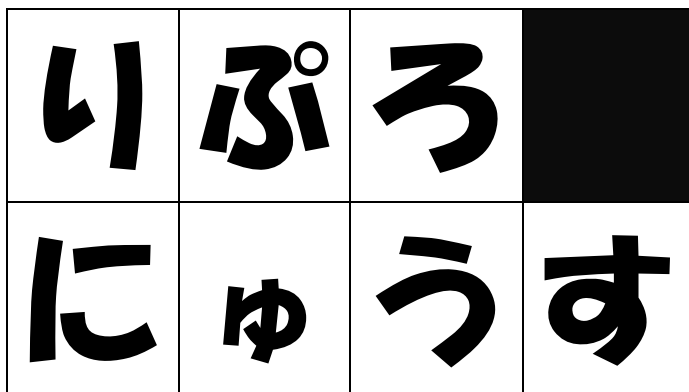




2014. 4 月号 Vol. 34

編集・発行／リプロネットみやぎ

CONTENTS

■トークサロン

「不育症を知っていますか？」開催報告

■2014 年度通常総会・研修会開催案内

トークサロンを開催しました

「不育症を知っていますか？」

2月1日(土)、エル・パーク仙台特別会議室で今年度3回目のトークサロンを開きました。テーマは「流産を繰り返す不育症を知っていますか？」。自身の経験をきっかけに、不育症を取材、2011年にドキュメンタリー番組(※1)を制作したフリーディレクターの松本真理子さん(リプロネットみやぎ会員)のお話を聞き、番組の録画を視聴して、語り合いました。参加者は一般4人、会員9人でした。



■ 不育症に苦しむ人は140万人

「不育症」という言葉はほとんど知られていません。妊娠はするものの流産や死産を繰り返す病気です。厚生労働省の調査によると推定140万人の人がこの不育症に苦しんでいます。妊娠経験者の4割が流産を経験しているという数字もあります。

私は患者の一人として悩み抜いた末、当事者の存在を多くの人に知ってもらおうと番組を制作しました。東日本大震災の直後から、不育症の研究・治療で先進的な名古屋市立大学病院に1年間通って、患者さんたちの生の声を取りました。



不育症のリスク因子としては抗リン脂質抗体症候群、子宮形態異常、甲状腺の異常、染色体異常などが挙げられていますが、患者さんの6割以上は原因がはっきりしないのです。治療には薬や検査など多額の経費がかかります。神奈川県患者団体「不育症そだってねっと」(※2)は不育症の周知と公的支援を求めて活動しています。活動が実を結び、助成を導入する自治体はだいぶ増えましたが、残念ながら東北ではごく少数です。宮城には専門医がおらず、治療できる医療機関もほとんどありません。不育症の治療環境は都道府県によって地域によって、かなりの格差があります。

■ 精神的に追い詰められる

流産、死産を繰り返す苦しみは周囲の身近な人にも言えず、一人で抱え込んで精神的に追い詰められます。テレビで赤ちゃんのおむつのCMを見ただけで泣けてきます。「うらやましい」と思ってしまう自分がさみしく思えて、激しく落ち込んだりします。「私が働いていたからではないか」「何か体に障るようなことをしたのではないか」と自分を責め、行き場のない気持ちになります。

妊娠することが怖くなり、前に進めなくなってしまう。社会には「女性は子どもを産んで一人前」という母性神話がいまだに根強くはびこっていて、何気ない言葉に傷つけられることも少なくありません。たとえば、「妊娠できるだけいいでしょ」とか「また、頑張ればいいよ」とか…。本人は悪気がなく、励ましのつもりだったりして、傷つけていることに気づかないのです。流産することをタブー視する雰囲気もあって、患者はますます悩みを内に仕舞い込んでしまいがちです。



■ 番組の反響

こうした患者たちの思いを知ってほしい。それが、この番組の一番の狙いでした。大震災で多くの命が失われ、私たちは人の力の及ばない自然というものの大きさを痛感しました。命が生まれるということは奇跡の連続であり、自分もそうして育まれた大切な命なのだというメッセージもまた、番組を通じて伝えたいと思いました。

深夜2時という時間帯の放映にもかかわらず、視聴率は5%、シェア(同じ時間にテレビを見ていた人のうち、この番組を見ていた人の割合)は5割と、多くの人が観てくれました。「不育症に苦しむ人がそんなに多いとは知らなかった」「知らずに傷つけていたことに気付かなかった」「自分の娘が流産を繰り返している。どう接したらいいかわからない」など、さまざまな声が寄せられました。

■ 苦しみを共有して、前へ

私の経験から、一人で悩まず、まずは患者同士でコミュニケーションをとることをお勧めします。私は思いを共有できる人と話したくて、いくつかの患者グループに参加しました。みんなが異口同音に話す言葉を聞くと「私だけじゃない」と思えて、すごく楽になりました。

一番役立ったアドバイスは、「周りの人から傷つくことを言われたときに返す定番フレーズを用意しておこう」というものです。積極的に自己防衛しようというわけですね。

それから、夫婦で痛みを共有することも大切です。たとえ流産・死産であっても、当事者にとって赤ちゃんがおなかの中にいたということは事実。生まれてこなかったとしても存在しているのです。その思いをパートナーと分かち合えるといいですね。実は、不妊症より不育症の夫婦のほうが離婚率が高いというデータがあります。妻と夫の間に心のギャップが生まれて、コミュ



ニケーションがとりづらくなってしまうという傾向があるようです。

厚生労働省の不育症研究班がウェブサイト「Fuiku-Labo」で情報を提供しています(※3)。啓発ポスターは「流産をくりかえす人の85%が検査と治療によって無事に出産までたどりつきます」と語り掛けています。ポスター制作に携わった研究班の名古屋市立大学大学院医学研究科産婦人科学の杉浦真弓教授は話しています。「妊娠が怖い、というところから一歩踏み出してほしい」と。

※1 テレメンタリー2012「妊娠・出産をあきらめない 不育症との闘い」(テレビ朝日、2012年1月31日放映)

※2 市民団体「不育症そだってねっと」 <HP> <http://www7.ocn.ne.jp/~fuikusho/>

<E-mail> fuikushou@gmail.com (代表:工藤)

※3 ウェブサイト「Fuiku-Labo」 <http://fuiku.jp/fuiku/>

【終了後アンケートの回答より】

- 「不育症」という言葉自体、まだまだ広める努力をしなければと思った。公的助成を受けられる運動を宮城県でも是非進めたい。(64 歳女性)
- とても共感できることが多く勉強になりました。今後がんばる勇気を得ることができました(35 歳・女性)
- 体験者のお話、参加された方々の体験談、どれも貴重でした。仙台で初めての不育症の研修会、有意義で今後の不育症対象者や一般市民への啓発活動の一步になったと思います。(46 歳・女性)
- 「不育症」に関する実に色々な情報に触れることができ、非常に貴重な研修になったと思います。むしろこうしたお話は、男性たちにこそ聞いてもらいたいと感じました。(58 歳・男性)
- 体験者のお話貴重でした。自分で乗り越えただけに止まらず、このように深いところまで踏み込んだ番組制作をすることで成し遂げた松本さんの凄さを感じました。(37 歳・女性)

《2014年度「通常総会」並びに「会員研修会」を開催いたします》

日程:5月21日(水)

時間:18:30～19:00 通常総会

※同封のハガキにて出欠をお知らせください。

19:00～20:30 会員研修会

※一般の方もご参加いただけます

会場:エル・パーク仙台／セミナーホール(仙台市青葉区一番町 141 ビル5F)

《会員研修会の内容》

同封のチラシをご覧のうえ、ぜひご参加ください。

また周りの方へのお知らせや参加のおすすめなど、広報のご協力をよろしく
お願いいたします。

《返信ハガキの返送締切》

返信ハガキは4月末日までご返送ください。

【編集後記】

今回、仙台で初めて「不育症」に関する研修会を開催することができました。
当事者としての体験を経て、「不育症という病気や、それに苦しむ患者の思いを知ってほしい」という狙いで番組を制作された松本さんの言葉は重く、また優しさに溢れていました。今後も同じテーマでの企画を考えていきたいと思いますので、ぜひご参加ください。今後ともリプロネットみやぎをよろしくお願いいたします。

リプロネットみやぎ事務局

FAX:022-292-0167

e-mail:repro@muraguchikiyo-wcklinic.or.jp